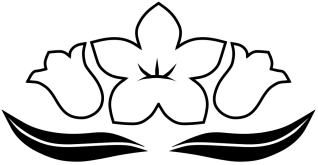
勝てない相手
は
もういない



なまけもの亭

＊目　次＊

目次 04
はじめに――お題が決まるまで 05
『狩竜奴（かりゅうど）ライルのとんだ災難』 たつみ暁 06
『ウィリアム・グローリア』 アヤキリュウ 31
あとがき …アヤキリュウ 46
…たつみ暁 47
奥付 48

それは合同サークル参加の打ち合わせから始まった……。

（た：たつみ暁、ア：アヤキリュウ）

た「ファンタジーで合同誌一冊置けたらいいですね！」
ア「ぜひぜひっ♪」
た「お題があるとネタ浮かびやすそうです」
ア「双方の名前からなんて素敵ねーと思ったのですが…。
暁…流…暁の…流星…暁の…流…行語大賞？」
た「今ぐぐってきたんですが、使えそうなのって『ありのままで』『ごきげんよう』『壁ドン』『レジェンド』ですかね！？」
た「ノミネートに残ってた（テニスの）錦織選手の**『勝てない相手はもういない』**も面白そうですね〜」
ア「確かに**『勝てない相手はもういない』**は面白そうですね。自分では絶対に書かない（書けない？）感じ。(笑)」
た「では首絞めにかかりますか！？(笑)」

……大体こんな経緯でお題が決まった合同誌、
『勝てない相手はもういない』です。

狩竜奴（かりゅうど）ライルのとんだ災難

たつみ暁

人里離れた森の中。鬱蒼と木々が生い茂っているせいで、昼間だというのにやや薄暗い。リスがちょろちょろと枝を渡り、木の実を見つけ、かりこり音を立ててかじりつく。

が、不意に近づいて来る轟音を聞いて、リスは木の実を中途に放り出し、怯えるように枝を伝ってその場から逃げ出した。

しばらくして、ずどどどど……と、何か重たいものが地を蹴り周囲の木をなぎ倒して近づいて来る音がする。

現れたのは、鋭い牙の並んだ顎（あぎと）を開いて走る黒い猛獣。いや、獣と呼ぶには語弊があるかもしれない。

奴らは獣を超越した存在。一枚一枚が硬い楯のような鱗に覆われ、樹齢数百年の丸太ほどもある手足を持ち、爬虫類系の顔には爛々と輝く銀の目。背にはその姿には似つかわしくない、堕天使のような羽根を一対生やし、蛇のようにによろにょろとした尻尾を揺らしている。

「おら、来いよ化け物」

その生物を前に、己の背丈と同じほどの大剣を担いで、挑発的に手招きする、人間の男が一人いた。

歳の頃は三十を超えているだろう。ちりちりの茶色い無精髭を生やした顔に、余裕の笑いを浮かべている。

「さっさと俺に狩られろ、くそったれの竜様よ」

竜。

この大陸でそう呼ばれる存在は、強面な外見通りの獰猛な性格を持ち、人間を襲ってくる。

彼らがいつから存在し、どうして人間を襲撃するか、誰も知らない。歴史が古すぎて、史書を紐解いても、大陸の創世からいた、それしかわからないのだ。

とにかく、人と竜がこの大陸で相容れない存在である事は確かな事実である。だが、人間も漫然と襲撃に甘んじている訳ではない。剣や槍、弓を手に、果敢に立ち向かい、竜を倒す者がいる。彼らは『狩竜士（かりゅうと）』と呼ばれ、驚異から人々を守る猛者として讃えられている。

今、黒い鱗に覆われた竜の前に立ち、傲然としているこの男も、狩竜士の一人であった。挑発された事をわかっているのかいないのか、竜が苛立たしげに吼え、大口開けて男にまっすぐ突進してくるのを目にして、たん、と軽く地を蹴り飛び上がる。大きな得物と、それを手にする筋肉質の身体がまるで嘘のように軽い跳躍。が

ウィリアム・グローリア

アヤキリュウ

王国北部の田舎町に生まれた俺は、幼少期から町外れの剣術道場に通い、元宮衛隊長の師範にその才能を見出された。

師範の優れた指導と俺自身の不断の努力によって、決して奢ることなく自らの才能を磨き続けた俺は、各地の剣術大会を渡り歩いては次々と勝利を挙げた。国一番の剣士との呼び名をほしいままにして、弱冠二十歳で国王の身辺警護を最重要任務とする最強集団・宮衛隊を統べる地位に任ぜられた時、俺はもはや自分が勝てない相手はこの世に存在しないのだと悟った。

これは奢りではなく、紛れもない事実……のはずだった。

「ヘイズリー、勝負だ！」

俺は、王宮の中庭にある小さな薬草畑で若芽を摘み取っているフローレンス・ヘイズリーに声を掛けた。

「ウィリアム・グローリア……またあんたなん？　もうええ加減にしぃや。」

ヘイズリーは呆れたような表情を浮かべ、緩慢な動作で振り返る。いかにもやる気なしと言った風で、俺は余計にやる気が湧いた。

今日は入念に考えた作戦がある。主力の長剣とは別に、短剣を二本用意した。敢えて相手に主力を折らせ、勝ったと油断したところを踏み込むのだ。騙し討ちのよ

うなやり方は本意ではないが、本気の真剣勝負となれば生き抜くために背に腹は変えられない。
長剣を構えた俺は、彼女がしっかりと俺に向き直るのを確認して、踏み込んだ。
「ヘイズリー、覚悟！」
俺は彼女に向かって真っ直ぐ剣を振り下ろそうとしたが、彼女は、馬鹿にしたような笑みを浮かべて真っ赤な唇を微かに動かし、次の瞬間、俺は突然現れた旋風に巻き込まれて宙へと舞い上げられた。動揺する間もなく、すぐに地面へと叩きつけられる。
「あたしの勝ちや。」
「ま、まだだ……この程度で諦めるほど俺は……ぅわっ!?」
俺が立ち上がろうと地面に手を突いて肘を張ると同時に、背中に重い衝撃が走って俺は再び地面と抱き合った。
背中の方から、コロコロと小さな丸いものが目の前に転がって来る。
俺は伏したまま――背中に乗った何かが重くて動けなかったのだ――その丸いものに手を伸ばした。
「擦り傷用の軟膏や。弱っちい宮衛隊長殿にはたくさん必要やろ？」

こちらは、なまけもの亭（アヤキリュウ＆たつみ暁）の合同誌『勝てない相手はもういない』のサンプルデータです。

お話の続きは、2015 年３月８日（日）に川崎市産業振興会館にて開催される Text-Revolutions 第１回にて発行する予定の合同誌本誌でお楽しみください。

なまけもの亭
http://oct.opal.ne.jp/nmkmn/

【連絡先】
アヤキリュウ
サイト（ここち亭）：http://oct.opal.ne.jp/
Twitter：ayakiryu_
たつみ暁
サイト（七月の樹懶）：http://july.main.jp/
Twitter：tatsumisn